

42136

教科書文庫

4
810
42-1916
200030
1960

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

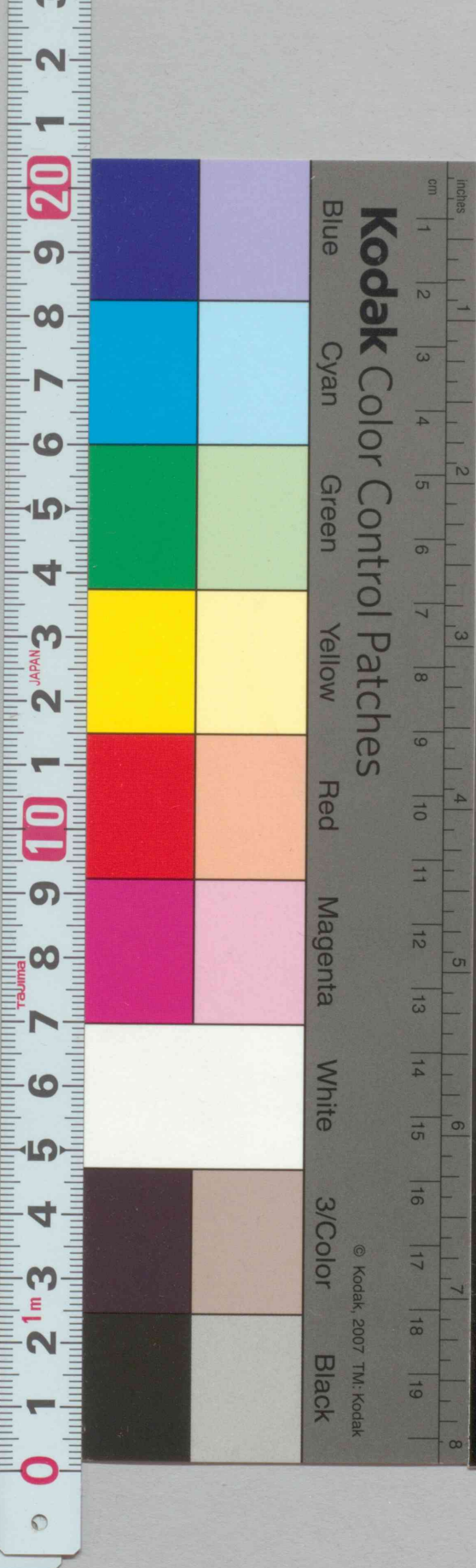


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



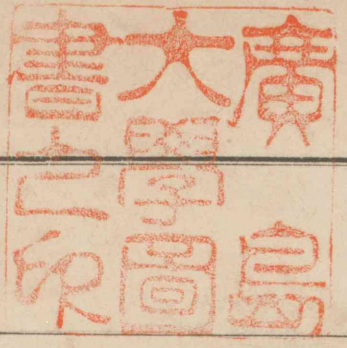
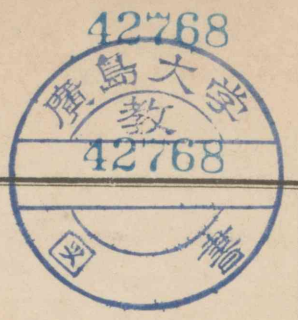
3759
Da20
資料室

訂改 高等女學讀本 卷二

375.9
S220

資料室

日二十二月一年五正大
濟定檢省部文
用科語國校學女等高



佐藤 球
鹽井 正男
共編

訂改 高等女學讀本

東京 株式會社 明治書院

訂改 高等女學讀本卷二目次

一、	無學の旅……………	一
二、	土地と植物……………	四
三、	月の世界 (口語文)……………	一〇
四、	秋夕友を招く文 (書簡文)……………	一八
五、	心のままに (韻文)……………	二〇
六、	日章旗 (口語文)……………	二三
七、	日本帝國……………	二八
八、	俚 諺……………	三三

目次

九、	新世界の發見 その一	三三
一〇、	新世界の發見 その二	三八
一一、	車窓偶感	四五
一二、	信用	四九
一三、	賢明なる裁判官	五三
一四、	振子の不平 その一 (口語文)	五九
一五、	振子の不平 その二 (口語文)	六三
一六、	歳末日記	六八
一七、	歳の暮 (韻文)	七三
一八、	年中行事	七五
一九、	宮中の元旦	八〇

二〇、	祖先の祭祀	八五
二一、	座右の銘	九〇
二二、	冬の雪國 その一 (口語文)	九三
二三、	冬の雪國 その二 (口語文)	一〇〇
二四、	寒中見舞の文 同返事 (書簡文)	一〇五
二五、	樺太	一〇八
二五、	伊能忠敬 その一	一一四
二七、	伊能忠敬 その二	一一九
二八、	學藝に志す者の訓	一二三
二九、	犬ころ その一 (口語文)	一二六
三〇、	犬ころ その二 (口語文)	一三〇

三一、 犬ころその三 (口語文)……………一三四

三二、 雛祭の記……………一三八

三三、 少女緹縈……………一四二

三四、 慈善家……………一四六

三四、 櫻花 (口語文)……………一五一

卷二目次終

改訂高等女學讀本卷二

一、 無學の旅

旅して口惜しきは、我が財をもつことの少なきよ
 りも、我が學を積めることのまだしきにあり。歴史に
 詳りしく通じたらんには、わづかに遺れる古の河の流
 城の墟こ、或は破れたる寺、頽スダれたる塚ツチなどに對して、
 限なき感^{わづか}を起し、人知らぬ興を覺えて、身にしみ心
 とまる事も多かるべきを、何事のありし處とも知ら

わらぢ(草鞋)

で、我が學の疎きまま、何の趣味も感ぜず、草鞋のみ多く穿き破りて、そこそこに通リ過ぎなんは、口惜しきことの一つならずや。地理をよく知りたらんには、路の通塞をも難易をも、胸によく曉り得るが故に、日暮になほ宿るべき處を得て、迷ひ歩くなどいふ、愚しき目にも會はず、ただ僅の迂回せざりしたために、惜しき名勝を見落すといふやうなる事も無く、よろづに付けて、心確に便多かるべきなり。

回一回

草木禽獸につきての知識乏しきも、すべての物を大様にのみ見て過ぐすほどに、異なる郷の珍しき花

をし(惜)

鳥を眼にしながら、唯、紅き花咲き居たり、白き鳥翔り居たりとばかり覺えて、何一つ明に知るといふこと無く、後に人に問はるることあらんをり、「知らず」とのみ答へんは、これまた口惜しからずや。農工の事につけても、繪畫彫刻の道につけても、またさなり。無學にして旅するは、たとへば夜行くが如く、すべての美しきものをも認めずして過ぎなん。

學問は急に如何とも爲し難し。されども、注意といふことは、我が心のおき方にて、深くも淺くもなるべければ、旅にありては、如何なる物にも事にも、つとめ

豊一豊

て深く注意すべし。注意は知識を生じ、やがては、その人を趣味豊なる人となして、すべての事物について、興味を多からしむるものなり。されば、その人、旅したるが爲に、少なからぬ利益を得んこと、疑あるべからず。(幸田成行―露伴叢書)

二、土地と植物

嬢等、汽車に乗りて長き旅行を試みよ。到る處、山送り水迎へ、原野ゆき森林來りて、その景色の異なるものあるを覺えん。こは山容水態、自然の地形にもとづ

くは固よりなれど、又、そこに生ふる草木が、さまざまの趣味を添ふるにもよるなり。

かはる(變)

今、東京より直江津行の汽車に乗りて、武藏上野の平野をすぎ、高崎に至りて左に折れ、妙義の山の麓にそひ、横川の驛に達せんか、この間のながめは、東京附近とさらに變るところなく、別に目をひくものもなからん。されど、その驛より、齒輪軌道により、碓氷の嶺をのぼり、輕井澤に至らんか、氣候の俄にかはると共に、野生植物のありさまも、また大いにその趣を異にせん。ことに、盛夏の候、野に原に百花の咲き亂るるな

廟一屆

鬱一鬱

ど、東京附近の春の景色に似たるを見るべし。さて、これより更に道をかへて、下野なる日光山に遊び見よ。東照宮の廟のあたりは、老杉枝をまじへて、晝なほ暗きを覺えん。馬返に至り、急坂を攀ぢ、中禪寺に達せんか、湖畔一帶の山腹には、落葉木おほく、その若葉の時のごときは、緑したたるともいふべからん。また、男體山に登らんか、白根山の麓に至らんか、樅、落葉松等の針葉樹の密林、鬱鬱蒼蒼として、遠きところよりも、なほそれをみとめ得べきなり。また、赤沼が原などには、水蘚の生ひしげれるのみならず、高原固有の草花お



二、土地と植物

ほく、夏時に至りて
 一時に花開くなど、
 原頭、宛も一大花苑
 の現れたるが如き
 おもひあらん。
 嬢等はこの旅行にて、
 各地の植物の、自らかは
 りあることを知りたら
 ん。されど、猶、此等の地方
 は、本邦の中土にして、互

に相距ること遠からざれば、さほどの差異もあらざるなり。更に船に乗り、北の方、奥羽より津輕海峽を渡りて、北海道に入らんか、普通本邦中央部の低地に生ふる草木、並びに固有の竹類を見ず。かへりて、中央部の山地に自生する草木の、一般に平原に生ふるを見るならん。猶、北行して千島群島に至らんか、植物帶全くかはりて、寒地固有の風景をあらはし、一木一草、皆目なれざる心地するも、奇といはば、また、奇といふべからん。さて、更に行を轉じて、本邦西南部にむかひ、中國より四國を経て、九州に入らんか、植物帶のありさ

おほし(多)

ま、全く前とかはり、暖地固有の植物、即ち、肉桂・樟・楊梅の類のみ多からん。これより、南の方、琉球諸島に至らんか、芭蕉・蘇鐵の類、ことによく生ひたち、更に進みて臺灣に至らんか、榕樹・木生羊齒の類生ひしげり、殆ど熱地植物帶の光景を現さん。

かく、寒熱兩帶の植物、その發生をほしいままにするは、わが版圖の、南北に延長して、廣袤數千里、氣候・風土、地によりて大いに異なればなり。孃等、北の方に生まれたらんか、南の方に行きて、その有様を見よ。孃等、南の方に生まれたらんか、北の方に行きて、その景色

を見よ。その差異、實にここに述べたるのみには限らざるべきなり。(三好學—植物學講義)

三、月の世界

月の表面には、水がない。それから又、空氣がない。勿論、我我は、到底、月の世界に往くことは出来ぬ。たとひ往けたとしても、水や空氣が缺乏して居るから、一時も生活することは出来ぬ。しかし、假に、我我が月の世界に往つて、そこに暫く生活すると想像すると、色色面白い事がある。

處—処

擣—搗

まづ、第一、目に著くのは、ただ、低い處と、高い處とがあるばかりで、海は勿論、湖も川もないこと、我我の世界から見て、最も光つて見える處が山で、その山は



月の表面

皆舊火山で、絶頂に大きな坑がある。中には富士山のやうに孤立して居るものもあるが、多くは連山脈を成して居る。地球からはやや暗く見えて、俗に、「兎が餅を擣いて居る」といふ處が低い處で、昔の人が海だと思つて居た處である。

地球の表面には空氣があつて、太陽から受けた光を、八方に反射して散らすから、直接に日に當らぬ場所でも、多少光がある。即ち、日陰でも眞暗ではない。所が、月の世界には、その空氣がないから、日向はあかすが、日陰は眞暗である。山陰などに往くと、日蝕皆既の時よりも暗い。

月も、地球と同じやうに、自分の軸のまほりを廻轉して居るから、月の世界にも晝と夜とがある。しかし、月の廻轉は、地球の廻轉よりも非常に緩いから、月の世界の一晝夜は、我我の世界の二十九晝夜半、即ち、お

よそ一月ばかりに當る。そこで、月の世界では、半月の間晝が續いて、半月の間夜が續くのだから、どんな辛抱強い者でも、随分こらへられまい。

ちがひ(違)

それに、晝の暑さと夜の寒さとは、いづれも甚だしいのである。半月も絶間なく日に照らされては、地面の熱くなることは非常であるに違ない。我我の世界では、例の空氣が、太陽の熱を中途で吸ひ取つて、自分が温まつて、風になつて、他の冷えて居る方に、その熱を持つてゆくけれども、月の世界ではそれがなから、日向に出て居たならば、大抵の人が焼け死ぬほど

さへさる
(遮)

であらう。又、夜の時期になると、これまでの晝の間に、地面が太陽から受けておいた熱を放射するばかりで、そのうへに、この放射を遮るところの空氣がないから、熱はずんずんさめてしまふ。そんなことが半月も續くのだから、夜の明ける頃になると、どんな厚い衣を着て居ても、寒さに耐へることは出来まい。

いる(要)

それで、月の世界では、冬の寒さ、夏の暑さといふことよりも、夜の寒さ、晝の暑さといふことの方が、劇しい變化である。冬服夏服ではなくて、夜の服、晝の服、朝の服、晩の服などと唱へる、非常にかはつた服が要る

筈である。

月は、地球の腰巾著の様なもので、地球からたんと離れてゐないから、大體、月の世界から見た天と、地球から見た天とは大差はない。但し、月の世界からは、晝でも星が見える。例の空氣がないからである。その上、雨天だの、曇天だのがないから、いつでも星の觀測が出来る。

をとこ(男)

ここに、妙なことがある。月は、我我の世界に、いつでも同じ半面を向けて居る。これは、肉眼でも大抵分ることとて、兎が餅を擣く形だとか、桂男が斧で桂を伐る

形だとか言ひ傳へた圖は、皆同じ物である。そこで、月の世界では、いつもわが地球を見得る半球と、いつも見得ぬ半球とがある。それから又、地球から見て、月の盈虧があるやうに、月の世界から見ると、地球の盈虧がある。我々の世界で朔といふ時、即ち、太陽が月の後に廻つて居て、月が見えなくなる時に、月の世界から地球を見ると、満月の形に見える。それから段段に虧けてしまつて、見えなくなつた果は、また、新月の形に見えてくるのである。

月の直徑は、およそ、地球の直徑の十一分の三であ

ちひさし(小)

る。そこで、月の世界から見ると、太陽の大きさは、我々の處から見るのとかはらないが、地球の大きさは、太陽の殆ど四倍位に見える。だから、月の世界での第一等の觀物は地球である。月は地球よりもちひさい上に、その質が粗である。そこで月の表面にあるものが、月の中心に引かれる力が弱い。地球の表面のものに比べると、二十三分の四位である。目方二十三貫目の品物を、月の世界に持つてゆくと、四貫目の重さになつてしまふ。人間の體も、そのとほりに軽くなるから、幅飛でも、高飛でも、大變に容易くなるわけである。し

かし残念なことには、空氣がないから、もし、翅があつても、鳥のやうに飛ぶ譯にゆかない。(寺尾壽)

四、秋夕友を招く文

朝夕は漸く冷氣をおぼえ、心地よきかぎりに候。をりから、去年移し植ゑし草花、今をさかりにて、狭き庭には候へども、夜に入りては、蟲の音さへ所せく聞きわたされて、さながら郊外の趣を呈し、月影に光を磨く露の景色も、見所候はんと存じ候。さて、にはかの思ひつきにて、させるまうけ

にはか(俄)

はこれなく候へども、唯、母が自慢の栗飯をさし上げたきよし申し居り候へば、何とぞ、午後五時頃より、御兩人御連れだち、御出で下されたく、ことに、御妹様の御琴、この頃はますます御上達のよし、清き光の下に、さやけき一曲拜聽致され候はば、心もいかに澄みまさり候はんと、母も樂しみ居り候。もとより内内の事に候へば、あなた様方の外には、學校の友だち兩三名のみに御座候。御先約のありやなしやは存ぜず候へども、枉げて御出でたまはりたく、待ち上げ申し候。まづは

御案内まで。かしこ。

五、心のままに(武島又次郎)

ゆふべの空を	眺むれば
嵐に雲を	はらはせて
かがやき出づる	望 <small>モチ</small> の月
心のままに	なるならば
取りてかざりて	わが母の
朝の鏡に	まゐらせむ。

まゐらす
(參)

をかほ
(小川)

あしたの野邊を	眺むれば
千草もも草	生ひたちて
寝よげに見ゆる	あやにしき
心のままに	なるならば
ねやにうつして	わが父の
夜のしとねに	まゐらせむ。
かどの小川を	うち見れば
ちさくかはゆき	音たつる
水にうかべる	星の玉

五、心のままに

心のままに　なるならば、
 取りてつらねて、　わが姉の
 髪のかざりに　まゐらせむ。」

遠きかなたを　うち見れば、
 赤・青・むらさき　とりまぜて、
 染めてかけたる　虹の綾。

心のままに　なるならば、
 取りて仕立てて、　いもうとの
 はれの小袖に　あたへてむ。」

あを(青)

いもうと
(妹)

六、日章旗

日章旗は我が大日本帝國の國旗でございます。諸外國の國旗には、それぞれ、大切な意味が含まれて居ります。やうに、日本の國旗にも、勿論、意味のある事でございます。私は、今わが日章旗を、色の上からと、地理の上からと、祭祀といふ事の上からと、國體の上からとに分けて、説明しようと思ひます。

まづ、色の上から申せば、全體、色には別段意味があるのではありますまいが、其の色を見る人には、種種

まをす(申)

な感情を起させて、それが色の意味の如く思はれるものでございます。さうして、其の感情は、人人によつて、多少の相違はございませうけれども、大體においては一致して居ります。

黒色は不鮮明にして、暗黒を意味し、不愉快の感じを人にあたへます。青色は強すぎて凄い。黄色はなんだかいやでございます。白色は至つて汚のない、清淨潔白の意味を表して居ります。西洋では、これに靜とか平和とかいふ意味をもたせて居ります。ただ困つたのは、軍の時の降參旗が、この色である事でございます。

ますが、これは、二心のない事を表すものらしいのでございます。赤色は、日本も支那も西洋も、みな同一の意味を持たせて、誠實を表します。丹心赤誠などの熟語もあります。西洋では、また、熱心の意味を持たせて居ります。熱心の極は烈しくなります。其の結果はあぶない。そこで、鐵道の警戒標サクラなどにも、赤色が危険を示す標に用ひられて居ります。日本の國旗は、其の熱心、其の誠實の塊でありますから、一朝破裂した時は危険でございますが、しかし、平和の白色で、これをつんで居りますから、心配はございませぬ。それも、外

あらはす
(表)

國人の仕向によつては、何時破裂して、彼等を驚かす
かも知れません。これ、全く日本の武士的氣象を表し
て居るのでございませう。

地理上から申しても、日本は東に位して居る、日の
出づる國でございませう。さうして、已に西の方の國と、
國際上の同盟も致しましたから、宛も太陽が東より
出でて、次第に其の光を西におよぼす如く、これより
は、東の勢力を益、西におよぼさねばなりません。日の
御旗は、實に、日本國の好徽章でございませう。

次には、祭祀上の事でございませうが、いづれの國の

國旗も、みな祭祀の意味を含んで居ります。祭祀とい
ふに語弊がございませうなら、敬神と申しても宜しう
ございませう。皇祖天照大神は、又、日神と申します。その
日神の御影に象られましたのは、神明の加護の下に
あるやうな心地がして、國民の欽仰の念を強からし
めまするものと思ひます。

國體の上から申しますれば、我が日本は、萬世一系
の天皇を戴きまして、其の金甌無缺天壤無窮なるこ
と、恰も太陽の始なく終なく、又、一の虧缺なく、圓滿に
して赫赫たる如きものでございませうから、これに優

りまする好徽章は、他に決してありませんまいと信じます。

以上は私一個の解釋でございますが、要するに、日本の國旗は、いかなる點より觀ましても、申分のない徽章であるとおもひます。どうか此の國旗の精神を全國に普及して、國民の愛國心を鼓吹し、日章旗の名譽を海外にまで輝かさせたいと存じます。

(松波仁一郎一講演筆記による)

七、日本帝國

日本帝國は、北樺太より南臺灣に至るまで、連亘して千二百餘里に達せり。随つて、寒暑の稍甚だしき地もなきにはあらねど、概して温帶中和の氣候にて、春夏の候に氷に閉さるる村もなく、秋冬の節に暑さに蒸さるる町もなし。春の花、秋の紅葉は更なり、驟雨一過しては月光洗ふが如く、積雪晴れ來つては一望の銀世界と化し、四季とりどりの眺は、絶えずこれを見ることが得るなり。

假に新附の朝鮮半島をさし措けば、日本全土は皆島國にして、南北に比すれば、東西の幅員頗る狭し。最

きは(際)

も廣き所にて、日本海の海岸より太平洋の波打際まで、五十里を出でず、山奥の肴屋にも、新鮮なる魚蝦を得べく、海邊の八百屋にも、今朝採りし松茸を見るべし。況や、山川は秀麗にして、國土はた豊饒なり。その天恵に富めることは、世界のいづれの國に比しても、決して劣るところあらざるなり。

されば、國民はこの美しく豊なる風土に化せられて、おのづから淳良なる風俗をなせり。親はこの豊なる海山の産物を、その子と共に味ひ、子はこの美しき花紅葉を、父母とともに眺む。親の慈愛も、子の孝行も、

あぢはひ
(味)

兄弟夫婦の情愛も、自らその間に養はれて、一家の睦しきこと、これ亦全世界に比類を見ざるなり。

この睦しき家より分れて、新しき家を立つるや、その分家の人人は、本家を父兄の家として、これに敬事し、本家の人人は、又、分家の人人を子弟の家として、これを保護し親愛す。かくて、分家より更に分家を出し、その支流漸く廣くして、日本全國に及びたるものを我が日本國民とす。

畏くも萬世一系の皇室は、日本全國民の總本家にして、全國の千萬家、相寄り相集まりて、これを敬重し、

即一即

これに奉仕するもの、即ち我が國家なり。皇室の我等臣民に臨み給ふこと、恰も慈親の赤子におけるが如く、我等臣民の皇室を慕ひ奉ることも、亦、孝子の父母に對するが如きものあるは、畢竟これが爲なり。嗚呼、この帝國に生まれ、この皇室を戴ける我等臣民こそ、世界の最も幸福なるものと云ふべきなれ。(佐々政一)

八、俚諺

- 一、祕事は睫。
- 一、燈臺下くらし。

たましひ。
(魂)

- 一、郷に入つては郷に従へ。
- 一、萬能足りて一心足らず。
- 一、三つ子の魂、百まで。
- 一、氏よりもそだち。
- 一、聞くは一時の恥、知らぬは一代の恥。
- 一、正直の頭に神宿る。
- 一、長者の萬燈より貧者の一燈。
- 一、鳥なき里の蝙蝠。

九、新世界の發見 その一

寶一宝

今は、世界地圖の半面に位置を占め、南より北に互りて著色せらるる亞米利加大陸も、數百年の昔までは、雲烟縹渺の中に隠れ、其の肥沃の土地も、猛獸毒蛇の棲所となり、其の無盡の寶庫も、徒に土人の手に委して、久しく世に光を現すこと能はざりしなり。

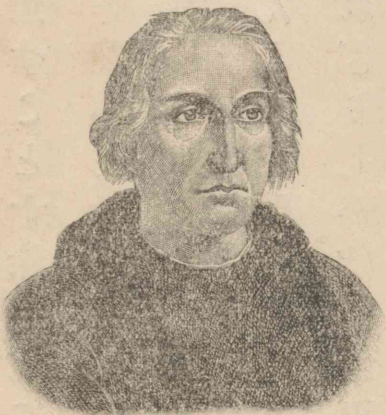
たふとし
(貴)

かかる貴き世界の一大陸を發見せしは、そもそも誰なるか。そは、イタリア國ゼノアの航海者コロンプスその人なり。コロンプスは、西曆紀元一千四百四十六年ゼノアに生まる。父は機織を業とせしが、其の家極めて貧しかりければ、コロンプスは、壯年に及びて、

一千四百四十六年
我が後花園天皇の文安元年。

志を起して水夫となり、多年航海の業に従事し、後ポルトガル國のリスボンに移り住めり。

當時ポルトガルにては、地理學の研究盛んにして、



コロンブス

且つ東洋の印度及び支那に到るべき航路に就いて、種種なる傳説想像行はれ、國王もまた、世界航路の探檢に心を傾けたり。此の時に當り、コロ

ンプスは、夙に地球の圓形なることを信じ、もし大西洋を西に航行せば、東方の印度支那に到ることを得

考一攷

べし。されば、もし相當の費用と、不撓の忍耐とを以てせば、一大發見をなすことを得べしと考へ、更に思を焦すこと十餘年、遂に此の推測の誤らざるべきことを確信し、ほぼ探檢の計畫を定めしかば、先づ國王に謁して、具に其の企圖を述べ、且つ實行に著手せられんことを願へり。然るに、其の議、不幸にして採用せられざりしかば、彼は更にスペインに赴き、國王及び女王に謁し、ひたすら其の舉を助成せられんことを請へり。

此の時スペイン國內動搖して、財政窮乏せしのみ

贊一贊

ならず、さまざまの反對さへありしかど、女王イサベラは、彼のいふ所、空論にあらずして、確實なる根據あることを認め、衆議を排してこれに贊成し、しかも、これを成功せしめんがためには、たとひ自らの祕藏せる寶石を失ふとも厭はじとて、コロンブスに、三隻の船艦を以て探檢の用に充つることを許したり。

コロンブスは、女王の優渥なる恩惠を謝し、必ず新陸地を發見し、陛下に無二の寶石と、不滅の名譽とを捧げまつるべし。ゆめ疑ひ給ふなと奏して、朝を退きぬ。

一〇、新世界の發見その二

コロンブスは、サンタマリア・ピンタ・ニーナの三隻の船に、水夫百二十人を乗り込ませ、スペインの西南パロス港より出帆せり。これ實に一千四百九十二年八月三日の事なり。かくて、カナリア島に著して、船の修繕をなし、九月六日、ここを出發して、西へ西へと進み行く。されど、眼界の及ぶ處、茫茫たる水と天とのみにして、一島の眼を遮るものなく、朝も夕も聞ゆるものは、唯舷を打つ激浪の響のみなり。されば、伴ひ

一千四百九十二年
我が後土御門天皇の明應元年。

來りし多數の水夫ども、漸くコロンブスの言ふ所に反するを疑ひて、これを批難し、或はその命に抗するものさへ出て來りて、彼の生命の危きこと、累卵の如くなるに至れり。

草一艸

十月上旬に至りて、近き頃裂きたりと覺しき數個の燈心草、斧にて伐りたる板、及び木の枝の流れ來れるあり。また海鳥の去來せるあり。十一日早天、更に木葉又は果實の附きたる枝、及び火に炙りて模様を刻みたる杖の、流れ寄るを拾ひ上げたり。これによりて、陸地に近寄りたることは明瞭となれり。ここにおい

て、水夫等は、コロンプスに先の罪を謝し、此の遠征の勝利を神に感謝し、更に新世界を歓迎すとして、一齊に歌ひはじめぬ。

かかる中に、日ははや暮れて、四邊暗黒となりぬ。コロンプスは、船の暗礁などに觸れんことを恐れ、命じて、帆を捲きて徐行せしめ、黎旦を待ちて、陸地を發見せんことを期し、且つ、最初に「陸なり」と叫びし者には、其の報告の事實なる時は、褒賞を與へんことを約したり。

かくて、東天曙光の閃くと共に、一發の砲聲は海面

に響き渡れり。コロンプスは、不意を打たれて、覺えずそこに跪きぬ。此の砲聲こそ、航路を導くために、他船に先立ちて進航せるピンタ號より、陸地發見の合圖として發したるものにて、實にコロンプスが多年の希望の達したることを報じたる響なりしなり。此の合圖とともに、「陸なり、陸なり」といへる叫聲は、檣の上、帆綱のあたりより、湧くが如くに起れり。時に一千四百九十二年十月十二日なり。をりしも、そよそよと吹き來る陸の軟風とともに、得もいはぬ芳ばしき匂、あまたの海岸より、船中に傳はり來ぬ。

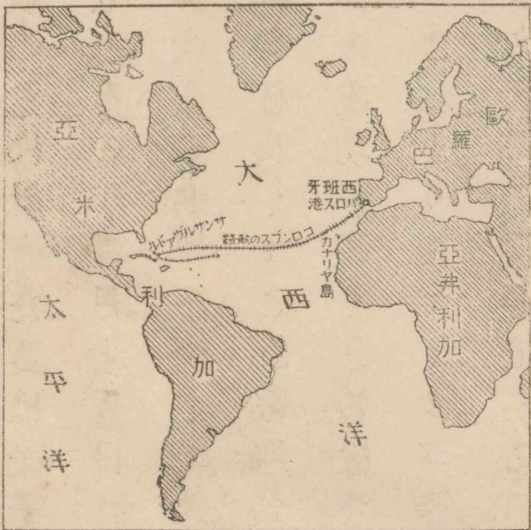
にほひ(匂)

胸—曾

朝日の昇るに従ひ、前面に當りて、海岸は現れ出でぬ。其の遠き一端は、なほ朝霧に閉されて見えわかざれども、低き濱邊より、地は次第に高くなりて、これを覆へる暗綠色の樹木は、蒼蒼たる天と相映射せり。かかるほどに、異様の姿をなせる男女、林の中より現れ來りて、この有様を凝視せしが、船體の奇異なるに驚き恐れて、再び引き返しぬ。此の光景こそ、コロンブスが、十數年來胸中に想像せる所なりしなれ。

彼は、靜に小舟に乗りて上陸し、地に接吻し、涙をそそぎて天に感謝せり。かくて、此の地にサンサルバド

島—嶋



ルの名を命じぬ。當時コロンブスは、自らアジアの東方に著せるなりと信じて、其の土人を印度人なりと思ひたりとぞ。

コロンブスは、其の土人の持てる金環を見て、何處の産なるかを手眞似もて問ふに、西南を指ししかば、これより西方にも、なほ島嶼あるを知り、更にこれらの諸島をも廻りて、一行の中、三十九人

歸一版

を留めて、最初の植民地を開き、其の他の者と共に、歸航の途に就きたるは一千四百九十三年一月十六日なり。その年三月十五日、コロンブスは、新世界發見の偉大なる名譽を齎して、恙なくパロス港に歸著しぬ。群衆狂喜してこれを迎へ、喝采湧くが如く、いづれもその成功を祝せざるはなかりき。

これより後、アメリカ等の探檢によりて、遂にアメリカ大陸は發見せらるるに至れり。しかも、これ皆コロンブスの先導によれるものなり。
(新撰女子讀本)

つひに(遂)

一一、車窓偶感

昨年
明治三十三年

余、昨年、歐洲漫遊を終へて米國に航し、ニューヨーク・フィラデルフィア・ウォシントンを経遊し、ナイアガラ瀑布を覽、シカゴを経て、カナダの廣原を横ざりしことあり。この廣原は、頗る山水の眺に乏しきところにして、明けても暮れても、ただ茫茫たる原野の中を、輾轉たる車の響に任ずるのみ。されば、余は、ひたすらこの地の民俗を觀察するを以て、その日ごとの務となし、途中屢下車して、そのあたりの僻村に足を入れ、そのさまざまなる風俗を觀、以て、わづかに長途の

旅情を慰めたりき。

乗一桒

汽車の、セントポールといふ地より支線に進み入りたる時のことなりけり。車中は乗客極めて少なく、寢臺附の一室には、余と、余の同行者なる某海軍中佐とを外にしては、米國の紳士二人の乗りたるのみなり。されば、我等とその紳士達とは、一二日の後、おのづから親しくなりて、互に姓名を名のりて、さまさまの物語にうち興ずるやうになれり。聞けば、その紳士の一人はニューヨークの豪商にて、このたび、ロッキーマンの麓に、一の新鑛山を發見したれば、それを調査せん

怪一怪

がために、おのが會社の技師なる他の一人の紳士を伴ひて行くなりとか。さて、我等はその紳士の贈りくれたる美しき桃の實を割きて、かつ味ひ、かつ談じつつありしが、余は何心なく、その桃の核を、足下なる唾壺の中に投げ棄てぬ。その時、豪商はつと立ちあがりて、その核をば唾壺の中より取り出して、窓外に擲ちたり。かくて、怪しみて見つめたる余を顧みて、徐にいふやう、「乞ふ君、姑く余の言を聞け。見らるる如く、わが米國は、なほ幼兒の時期にあり。これを生長せしめ、これを發達せしめ、以て、完全の壯丁たらしめ、よく歐

洲の文明國に對抗せしめん爲には、我等は、實に多大の苦心と勞力とを積まざるべからず。されば、我等は、實に君等外國人の同情ある援助を乞はざるべからざるなり。われ今、君の棄てたる一桃核を拾ひて、この茫茫たるカナダの大野に擲てり。おもふに、君は僕の所爲を解せざらん。君は年をほ壯なり。後年、君が再びこの地を過ぎん折あらん。その折よ、君もしこの桃核よりして、ここに一株の桃樹の、綠葉蓁蓁として蔭をなせるを見れば、そもや、いかなる快感に打たるべきぞ。ああ、われらは、君によりてここに一果樹を興へられ

をり(折)

したはし(慕)

たるなり。願はくは、他日、君と再會をその桃樹の下に期せん」と。余はこの言を聞いて、實にいふべからざる慚愧の念に打たれたるとともに、また、米人の心のいかにもゆかしく、その公德の念のいかにも慕はしきを思ひ、そぞろに欽仰の情を禁ずること能はざりき。(大橋又太郎「歐米小觀」による)

一二、信用

人の社會に立つに最も重んずべきものは信用なり。一人これを守らざる時は萬人疑ひ、それがために、

あづかる
(預)

簡易なるべき事も複雑になり、敏活なるべき事も遅滞になりて、その迷惑さいふべからず。一品を預かるにも受取を認めざるべからず、一枚の證書にも印章を捺さざるべからず。手数を要し、時間を浪費すること幾何ぞや。甚だしきは、啻に個人の不利を生ずるに止まらずして、國家の體面を害し、社會の平和を破るに至る。その弊の及ぶところ大なりと謂ふべし。殊に、商業社會にありては、信用を以て生命とす。されば、往々、その信用如何によりて、その國の商業の盛衰を卜するに足るなり。

かまふ
(構)

西洋諸國にては、信用を重んずること甚だ厚く、隨ひて、事務を取り扱ふこと簡易にして敏活なり。或人嘗てドイツに遊び、懷中時計を修繕せしめたることありき。時計師はこれを受け取りて、某日某時重ねて來られよといふ。預り證を求めたるに、時計師は怪しみ、且つ不快の色をなして、あれ久しくここに店を構ふれども、いまだ曾てかかる求に遇ひしことなしといへりとか。又、或人嘗てロンドンの或銀行に預金したることありき。受取證を請ひたれば、係員「さるものは誰にも出さず。また出す必要なかるべし。ただ帳

簿に記入しおかば、それにて事足らずや」といへりとぞ。

あひ。
（合札）

欺かざるものは疑はず。英國などの汽車にては、手荷物の受渡に合札を要せず。又、米國にては、電車に乗るに切符を賣らず、ただ昇降口に錢箱を置きて、客の自ら投入するに任すといふ。

支那人も亦商業上の信用を重んず。嘗て歐洲を漫遊せる人、歸朝の際、香港に上陸し、ふと支那人の店に籐製の椅子を賣れるを見たり。その中に見事なる細工の物あり。價を問ふに一弗なり。買ひたくは思へど

うたがひ。
（疑）

も、旅費已に盡きんとして、残る所幾何もなし。五十仙に負けずや」といへば、商人は、品物に懸直なし。もし直に拂ふこと能はずば、歸國の後送金せらるるとも差支なし」といひて、一面識もなき他國人に對して、少しも疑の色なかりきとぞ。かくの如くにして、始めて事務の簡易と敏活とを期すべきなり。（落合直文―中等國語讀本）

一三、賢明なる裁判官

むかし、一人の豪商ありけり。ある日、某の町に行きけるに、途上にてその財布を遺失せり。その中には、千

圓一円

圓の貨幣を入れ置きたれば、一時は、喪心せんばかりに驚きけるが、さてあるべきならねば、警察署にも届け出で、新聞紙にも廣告して、誰にても、わが財布を拾ひたらん人には、二百圓の謝儀を呈すべし」と約束せり。

二日ばかり経て、一人の商人らしき男訪ひ來て、われは、某處にてこの財布を拾ひぬ。思ふに、こは君の遺失し給へりといへるものならんとて、一個の財布を取りいませり。豪商は、聞くよりうち喜び、その財布を手に取りて眺めながら、これなり、これなり」と勇みた

案一按

ち、懇にその人を一室に請じ入れぬ。

さる程に、豪商は、かの謝儀のこと、ふと心に浮びぬ。いまだ財布を得ざりし間は、あはれ、いかにもして發見せられよかし、二百圓の謝儀は物かは、その半ばを割くとも惜しからず、など思ひ居たりけるが、今は何となく、いたう惜まるる心地して、終に、おぞくも、一計を案じ出せり。

ここに、豪商は、その財布を檢め、さて、貨幣を取り出して幾度となく數へつつ、さもいぶかしげなる面持にて、御親切の程は、ことばにも盡しがたく、嬉しく存

聲

じ候ふ。ただし、吾ハカが入れ置きしは、まさハコトトに千二百圓なりけるを、今數ふれば、二百圓不足なり。さては、早くもかの新聞紙の廣告によりて、御身、まづこれを收め給ひしにや」といへり。その人は、始より謝儀の事など心にとめざりけるが、この主人の無禮なることばに、いたく憤慨ウラカクして、「こは、思ひもよらぬ事をのたまふものかな。いかで、さる事の候ふべき。拾ひしままにてこそ持ち來りつれ」とて、聲あららげて怒れば、豪商もうち返して、「否」といひつつ、互タカに相讓アイニツらず、はては暴言をさへ交ふるに至れり。さらば、法廷にて黑白を争はんと

て、かの男は歸りぬ。

やがて、その事件は裁判沙汰となりぬ。裁判官は、靜に二人の陳述を聽きとり、さて、さまざまに訊問せしが、互に固く執りて少しも屈クせず。されど、賢明なる裁判官は、二人が應答の言語舉動キョウドウの間に、早くもその曲直を曉りけん。ここに、二人をして宣誓センセンせしめ、まづ豪商にむかひて、「汝の遺失したる財布には、たしかに千二百圓入りたりしか」と問ひ、然りとの答を得、また、拾主に向ひて、「汝は、その拾ひたる財布より、たしかに一金をも抜き取らざりしか」と問ひ、こもまた、「然り」と答

しほしほと

ふるを待ち、あらためて拾主にむかひて、「この財布は、これなる遺失者の物にはあらざるべし。汝は、これより、警察署に行き、改めてこれを届け出でよ。若し制規の期日内に、遺失者の届出なからんには、そは汝の所有に歸すべし」と宣告し、さて、豪商には、汝は千二百圓拾へりといふ者の届け出でん時節を待たざるべからず」と言ひ渡しつ。人の恩義をよそにして、あらぬ罪負はせんとせしわが身の過に、豪商も、今は返すべき語なく、しほしほととして法廷を退出しけりとぞ。

(内海弘藏—日本實業讀本)

針 鉞

一四、 振子の不平 その一

ある大家に、十年來狂つたことのない掛時計があつたが、ある夜、不意に振子の運動が止まつた。すると、長針と短針とが、上から聲をかけ、

「もしもし、振子君どうしました。君が休むと、僕等も動くことが出来ません。」

振子は「ああ」と溜息をして、

「いや、兩君、僕はもう仕事は止めます。僕はこの頃からつくづく考へたが、實にいやになつてしまひま

した。」

「どうしたんです。」「どうしたんです。」
と、兩針が異口同音に尋ねた。

「どうしたつて、少しは考へてもくれたまへ。僕の役目は君らも知つてるとほり、一秒一振の規則で、長針君がちよつと一分動く間に、僕は右から左へ六十振でせう。一時間には、六六、三千六百振、一晝夜二十四時間には、えいと、幾らになりませう。君らは毎日數字を指すのが商賣だから、一寸數へてくれたまへ。」

「八萬六千四百振」

と、長針が早速答へた。

「それ、其の通り毎日朝から晩まで、こつこつと同じことばかりして、一年に何程になりませうな。」

「大分手數がかかりますな。三千一百五十三萬と六千振」

と、今度は短針が答へた。

「それ見給へ。ちよつと算用するだけでも、それほど手數のことを、僕は實地に何返何千返となく繰り返して居るので。此の先、また同じことを何十年

かず(數)

も繰り返すのかと思へば、僕が退屈するのも無理
はありますまい。尤も、僕ばかり身勝手ミカテをいつては
濟みませんが、君たちも同様、毎日毎夜ちつとも休
む隙がない。然るに、どうです。あの圓盤エンパンめは、何時も
何時も大きな顔をしてわれわれを見下し、貧乏ゆ
すり一つしたことがない。實にいやになつてしま
ふではありませんか。

「さうだ。同感、同感」

と、長針が同情した。

「ストライキ」

と、方方で叫んだ。そのままチクタクの音は絶えて、夜
は靜になつた。

一五、振子の不平 その二

しばらくすると、圓盤は四邊を見廻し、

「おやおや、皆さんどうしたのです。困るぢやありま
せんか」

といふと、下の方から、極めて丁寧らしい嘲の聲を發
した。

「圓盤君閣下、定めてお困りでございませう。あなた

は毎日じつとして、私どもの働くのを御見物になるのは、さぞお楽しみでございませうが、私どもは一時間三千六百振、一日八萬何千振といふ身分で、先を考へると、随分退屈致しますゆゑ、今晚から少少休息いたすのです。」

圓盤は暫く考へて、

「うん、それでは振子君に御依頼致しますが、どうか、只今ここで一振だけ願ひたい。」

振子は依頼に應じて一振すると、再び依頼があつて、更に二振した。圓盤は眞面目になつて、

まじめ
(眞面目)

「如何です。只今のは御退屈でしたか。」

「いや、只今のは退屈ではありませんが、これから先何十年、何億萬の振動を考へると、退屈になります。」
「宜しい」

と、一つ咳ばらひをして、圓盤は演說調子で、

「振子君並びに諸君、暫時御耳を拜借致したい。只今振子君の申されるとほり、一秒一振には退屈はないが、只、行先の事を餘り多く考へるから、退屈するのです。凡そ何人と雖も、日日の務を盡して怠らぬ時は、遂には大事業をも成し、人間一生の義務を果

かほ(顔)

すことは、そのみむづかしい事ではありません。然るに、大事業・大義務を一時に目の上へ上げるから、退屈もする、失望もするのです。昔から英雄・豪傑・大學者・大事業家の成功は、何れも一秒・一分の功を積んで、退屈しなかつた結果ではありませんか。さて又、拙者の役目について申せば、毎日何のしよざいもなく、顔を晒してゐるよりは、寧ろ時時は諸君と共に運動もして見たいが、併し、拙者がぐるぐる回り出したなら、時間はさつぱりわからぬことになりますのです。されば、動くも職務、動かぬも職務、各

くだく(抱)

その職務を盡すのは、所謂社會の秩序ではありませんか。今もし諸君が不平を抱いて運動をやめたならば、十年來當家より受けた信用は、一朝に消えて、古道具店へでも遣られる外はありますまい。諸君、なにとぞ篤と御熟考あつて、これまでのとほり、同心協力あらんことを希望いたします。」

感じの鋭い長針・短針は、
「ヒヤヒヤ」

と賛成し、少少重くるしい振子も、

「謹聽」

おくる(後)

といつた。齒車撥條等、一同拍手喝采して、チクタクの音は再び始まつた。

此の問題のために、時計は五分後れたが、翌朝主人が起きて、懐中時計を合はせて見て、

「おや、懐中時計が五分進んでゐるわい」といつた。

さてさて、信用といふものはえらいものではありませんか。(新保磐次)

一六、 歳末日記

は。(蠅)

二十二日。水曜日。日本晴、風なし。蠅四五匹、切干を干したる筵の上に飛ぶ。漬物の手傳す。

二十三日。木曜日。手水鉢に薄氷張る。晝の暖さ、昨日の如し。早朝より煤掃を始め、四時過終はる。湯を浴みたれば、心地すがすがし。

二十四日。金曜日。空少しく曇りて、木枯身に浸む。髪を洗ひ、障子の張換す。山田の叔母上より、端書來る。病氣全快、年明けて早早年禮に來らるる由、報ぜらる。うれし。夜更けて、犬の遠吠頻りに聞ゆ。

二十五日。土曜日。霜柱立つ。午後より曇りて、雪ち

とほぼえ(遠吠)

めひ(姪)

らつく。毛絲の涎掛を編み上げて、岡山の姪に送る。仁川の姉上、青森の兄上へも、歳暮の小包を出す。垣根の檜の木に、名もしらぬ小鳥來る。

二十六日。日曜日。風寒し。強がりの三郎も、足袋をはく。庭の山茶花散り始む。三郎の綿入の縫ひかけと、とし子のめりんすの帯とを縫ひ上げたれば、夜は九時過になりぬ。風止みて、月冴えたり。明日の朝も大霜なるべし。

みづ(水)

二十七日。月曜日。霜白し。風なく暖なり。午前中洗張し、午後糯を水に浸す。三郎相撲を取りて、綿入の

袖を綻ばして歸る。町役場に會議あり。父上の御歸遅し。

二十八日。火曜日。雨降り、雲交る。勘定取前後して來り、新しき通帳を置きて歸る。柱曆數の子串柿蜜柑など、歳暮に貰ふ。

えり(襟)

二十九日。水曜日。氷厚し。棕櫚の葉に、風の音騒ぐ。

なは(繩)

收入役の木村様、襟卷に顔を埋め、寒げなる様して入り來られ、繩暖簾鼻で分けたる頭巾かなといひて、一同を笑はせらる。父上より下駄・足袋・手拭などを戴きて、皆皆喜ぶ。兄上、賣物の山林を見に行き、大き

なる門松を持ちて歸らる。山林を買ふ約束整ひ、今夜手附金を渡し、年明けて登記すべしとのこと。早く夕飯を済まし、餅搗す。隣の榮吉様夫婦手傳に來られ、賑はし。宵寝の三郎も、遅くまで嬉しがりて餅運ぶ。十二時搗き終はる。

氷—冰

三十日。木曜日。昨日に引きかへて、氷なく、霜なく、風なし。柿の木の根もとに、露の臺かすかに見え、水仙の花二輪咲く。兄上、門松を立て、神棚を飾らる。仁川の姉上より小包來る。美事なる雁なり。調理して隣へも分つ。何れも珍しがる。夕方、獵銃を擔へる人、

數多の獲物を携へて門前を過ぐ。

三十一日。金曜日。時時吹雪す。ごまめ、數の子煮豆などの重の内、雑煮の用意も済む。兄上と二人して年賀狀を認む。湯に入りて、母上御手打の晦日蕎麥を戴く。一年中の事を思ひかへすに、やましき事なくて嬉し。(高等小學讀本による)

一七 歳の暮 (中村秋香)

霰たばしり、風荒れて、
人足しげき八街に、

門松ひさぐ聲すなり。
今年もやがて暮れんとや。

暮れんとや。

花にやどれる春の鳥、
千草に眠る秋の蝶、
結びもとめぬ夢の間に、
はや一年は過ぎにけり。

過ぎにけり。

書讀む窓の雪明り、
闇は照らさで、いたづらに

頭にのみや積るべき。
たゆまず學べ、時の間も。
時の間も。

一八、年中行事

「元日や、晴れて雀の物語。老いたるも若きも、麗にさ
しのぼる初日影を仰ぎ見て、大御代の新年をことほ
ぎ合ふ。三箇日の朝を朝を、雑煮の餅を祝ふも、古き風
俗とて嬉しく、七日の粥にも、若菜摘みけん昔おもほ
ゆ。松の内もいつしか過ぎて、八日より、學校の授業

元日や云々
服部嵐雪の作

もちひ(餅)

も始まる。今は、一年中の最も寒き時にて、六七日の頃より二月二三日の頃までを寒といふ。

寒明けて立春となる。立春とは、東風氷を解く時なり」といへど、東北地方の餘寒の嚴しさは、寒の中にも劣らず。立春の前夜は節分にて、家家に「福は内、鬼は外」と、豆撒の聲の聞ゆる處、今もあるべし。十一日の紀元節も過ぎて、梅の花も咲きそむれば、梅一輪、一輪ほどの暖さの句も想ひ出さるれど、くまぐまに残る寒さや、梅の花の感はた無くはあらず。

雛遊は三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば、

ひひな(雛)

梅一輪云々
服部風雪の作
くまぐまに
云々
谷口蕪村の作

三月十日
明治廿七八年
戦役の最後の
大戦

桃の節供ともいひしが、今の曆にては、花の蕾、尙いと固し。三月十日は奉天占領の陸軍記念日にて、永く勇武なる軍隊の偉勳をしのばしむ。春分は二十一二日の頃にて、晝夜の長さ相同じ。俗に彼岸の中日といふ。即ち春季皇靈祭の日なり。中日の前後、各三日を併せて、七日の間を彼岸といふ。これは秋もおなじく、秋の彼岸の中日は、秋季皇靈祭の日なり。春の彼岸は、稲種をひたす時、秋の彼岸は、麥を蒔き初むる節なり。諺に「暑さ寒さも彼岸まで」といへり。

早くも咲き出づる彼岸櫻を魁にて、四月は、野も山

ことわざ
(諺)

も、花の雲なり。

五月の二日又は三日を八十八夜といふは、立春より數へて、八十八日目の意なり。苗代の苗漸く伸びて、青き疊を敷けるが如し。古人の句に、

苗代の、色紙にあそぶ蛙かな。

五日は男子の節供として、鯉幟の空高くひるがへるも勇ましく、二十七日は日本海海戦の海軍記念日なれば、學校にて海戦の講話を聞くも、思出多かるべし。

六月十一二日の頃より、梅雨の節に入り、連日の鬱陶しさ堪へ難けれど、農家には大切なる雨なり。二十

なはしろ
(苗代)

苗代の云々
谷口蕪村の作

五月廿七日
これも明治卅
七八年戦役の
大海戦。

なずらふ
(淮)

にぎはし
(賑)

五日は皇后陛下の御誕辰なれば、天長節になずらへて、地久節と稱へ奉るも臣民の至情にこそ。

七月七日の夕は、星祭の笹竹、田舎にては猶賑はしく、盆の三日の夜の精霊祭には、燈籠の火影物哀なり。

八月八日の頃は、曆にては立秋の節に當れども、處によりては、殘暑の暑中にまさること、餘寒の寒中より嚴しきが如し。この月の三十一日は天長節なり。

立春より數へて二百十日、二百二十日は九月の初に當り、暴風雨多き頃なれば、農家はしづ心なし。いつしか新穀も實りて、神宮の神嘗祭は十月十七日ぞか

嘗一嘗

し。この月の三十一日は、天長節祝日なれば、全國こぞりて聖壽を賀ぎ奉る。

十一月二十三日の新嘗祭も過ぎて後は、霜置き、霰たばしりて、日も次第に短し。十二月の末、残る日數も數ふるばかりになれば、處處に年の市など立ちて、人はまた新年を迎ふるに忙し。

親の用にたつ子幾人、年の暮。(高等小學讀本による)

一九、宮中の元旦

宮中にて行はせらるる年中の公事は、甚だ多きが

みぢかし
(短)

親の用に云々
炭太祇の作

おほばらひ
(大祓)

中にも、元旦の御儀式は、ことにめでたき御有様の限りなり。

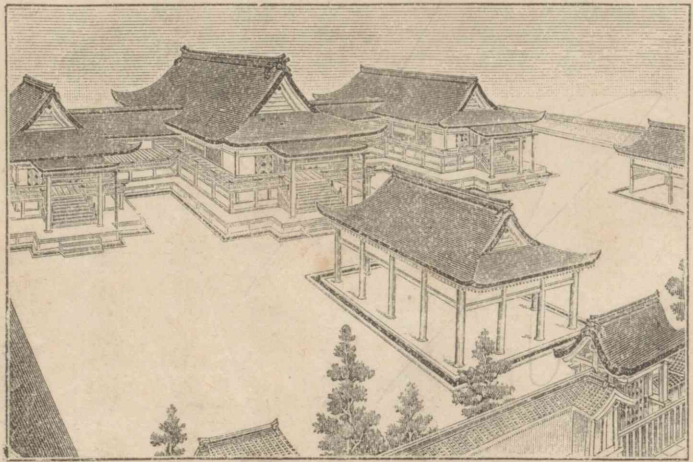
舊年の大晦日に、百官を始め、人民一般の罪穢を祓除する大祓の御儀ありて、ここに清く新しくめでたき新年を迎へたる元旦の早旦、陛下には賢所の綾綺殿に臨御ありて、御束帶を召させられ、御拜所に入らせ給ひて、伊勢皇大神宮、天地神祇を拜し、又、神武天皇の御陵竝びに先帝の御陵を拜し給ふ。これを四方拜の御儀といふ。

四方拜の御儀畢はりて後、賢所皇靈殿、神殿におい

ひきゐる
(率)

て歳首の御祭典を行はせ給ふ。まづ賢所の御儀あり。掌典長以下の官員相率ゐて、神饌幣物を供し、祝詞を奏す。次いで、陛下、式部長官を前行とし、侍從に御劔を奉持せしめ、侍從長、侍從武官長等を御後に從へ給ひて出御、御拜禮あり。次に皇靈殿の御儀、次に神殿の御儀あり。畢はりて入御し給ふ。皇太子亦御拜禮あり。これを歳旦祭といふ。次に晴御膳の御儀あり。此の御儀畢はりて、群臣の朝賀を受けさせ給ふ。陛下は御正装にて、皇后陛下と共に、正殿の御座に立たせ給ふ。式部の官員、正殿の入口に立ちて群臣を指導す。時刻に至

館
館



宮中賢所の圖

り、皇族の御方を始め、宮内奏任官以上の拜賀あり。其の後、群臣三等官以上、各國の公使館員及び勳六等以上の外國人、並びに雇外國人等の拜賀あり。自餘の朝賀に與るべき者は、翌二日、拜賀の禮を行ふ。その次第、元日に變ることなし。五日には新年宴會ありて、更に群臣に酒饌を賜ふ。東宮御所

においても、亦群臣の拜賀を受けさせ給ふ御儀あり。
 抑、朝賀の御儀は、朝拜とも賀正とも曰ふ。神武天皇
 御即位の時より以來、歷朝相承けて此の禮を行ひ、孝
 徳天皇の御代よりは、天皇太極殿に御してこの禮あ
 り。其の後沿革甚だ多く、明治中興の後も、時時變更あ
 りしかど、其の御儀漸く備はりて、現行の制となれり。
 かかれれば、この日、文武の百官より外臣に至るまで、
 肥馬に跨り輕車に駕し、正装燦爛として争うて參朝
 するさま、目も眩するばかりなるに、市中幾十萬戸、門
 毎に松竹を飾りて、一に聖世を壽ぎ奉り、軒毎に旭旗

ある(織)

を掲げて、互に新正を賀し、往來絡繹織るが如く、上下
 共に歡樂して、笑聲朝野に充ち満つ。亦盛んならずや。

二〇、祖先の祭祀

人は父母に本づき、萬物は天地に本づきて生ずる
 ものなり。先祖なくば、いかでか父母あらん。父母なく
 ば、又、いかでかこの身あらんや。さて、その生ける時に
 は、事へて誠を盡しあへざるが故に、祭祀の禮あり。
 祭祀の禮は人道の本なり。ここにおいて、誠を盡さ
 ざるときは、人道闕く。譬へば、父母、先祖は木の根幹の

たふる(倒)

ごとし。もろもろの枝葉花實は、伯叔父・姑兄弟・從兄弟、その外の諸親類・子孫の如きものなり。その木の根に土かひ水そそぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉・花實時に隨ひ茂り榮ゆるなり。若しその根のくつろぎゆるぐにも、土かはず水そそがずして捨て置くのみならず、剩へ、そのほとりの土を掘りのけ、根を押し動かす時は、或は、大風に吹き倒され、或は炎暑に枯るるは必然の事なり。枝葉ばかり大切に、して、それに水そそぎたりとも、その根本枯れたるうへは、枝葉のみ榮ゆべき理なからん。人の父

すぢ(筋)

母・先祖に疎なるは、みづから木の根を搖がして倒すに異ならず。その根枯るれば、かずかずの枝葉も從ひて枯るるは、みな人の知る所なり。されば、父母・先祖に厚くして、子孫の繁榮を祈るべきことなり。
さるに、父母・先祖に疎にして、頼むべき筋もなき佛神に媚び諛ひて、子孫の榮えんことを願ふは道理なき事なり。こを譬へていはば、松の木、茂り榮えんことを求むとて、梅の木に土かひ水そそぐが如し。松の榮えんことを求めば、その根に土かひ水そそぐに若かざらん。梅の榮えんことを願はば、その根を養ふに

微
微

若くことなからん。これ實理にして驗あることなり。

但し、父母・先祖に厚くするは、全く子孫の繁榮をね



松平定信肖像

がふのみにはあらず、本に報ずる微意なり。父母存生の中につかうまつるを計るにいくばくもなし。幼にしては未だ事ふる道を盡さず。やや成長しては、力を盡すことを知るといへども、或は公務に暇なく、或は文武のまなび、又は親戚のまじはり、他人の應對、職業のつとめ等によりて、父母

います(在)

の膝下にありて事ふることを得ざる日多し。たとひ生涯父母の膝下を離れずして事へたりとも、かぎりなき恩をば報い盡すべきにあらず。父母既に身まかりて後は、悔の八千度もかひなし。故に、歿後にはその神靈につかへて、いますか如く誠を盡すは、やむことを得ざる至情をつくすのみなり。子孫たるもの先祖に厚くば、先祖の神靈悦ばざらんや。さあらば、祈らずとても子孫の繁榮疑ふべからず。先祖の神靈に、子孫を守らざる神靈あらんや。

然るに、愚なるものは父母・祖先の神靈を疎末にし

つひやす
(費)

て願ふべき筋もなき神佛にても、靈驗あらたかなりといへば、ここの神に、かしこの佛に、多くの金銀をなげうち、我が身及び子孫の福を願ふは惑へるなりけり。その金銀を以て民を救ひ、善事に用ふるは、いのらざる祈にして、自らその身及び子孫にも福あるべきことは、必然の道理なり。神は非禮をうけずといふに、非禮の祈禱に多くの金銀を費すは、惜しむべきことならずや。(松平定信―燈前漫筆)

二一、座右ノ銘

辭一辭

- 一、父母ヲイトホシミ、兄弟ニ睦マジクスルハ、身ヲ修ムル本ナリ。本堅ケレバ末繁シ。
- 一、老ヲ敬ヒ、幼ヲイツクシミ、有徳ヲ貴ビ、無能ヲ憐ム。
- 一、忠臣ハ國アルコトヲ知リテ、家アルコトヲ知ラズ。孝子ハ親アルコトヲ知リテ、己アルコトヲ知ラズ。
- 一、祖先ノ祭ヲ慎ミ、子孫ノ教ヲ忽ニセズ。
- 一、辭ハ中ルベクシテ誠ナランコトヲ願ヒ、行ハ敏クシテ厚カラシムコトヲ欲ス。

く。(悔)

- 一、善ヲ見テハ法トシ、不善ヲ見テハ誡トス。
- 一、怒ニ難ヲ思ヘバ悔ニ至ラズ。欲ニ義ヲ思ヘバ恥ヲ取ラズ。
- 一、儉ヨリ奢ニ移ルコトハ易ク、奢ヨリ儉ニ入ルコトハ難シ。
- 一、樵夫ハ山ニ登リ、漁夫ハ海ニ浮ブ。人各、ソノ業ヲ樂シムベシ。
- 一、人ノ過ヲイハズ。我が功ニ誇ラズ。
- 一、病ハ口ヨリ入ルモノ多シ。禍ハ口ヨリ出ヅルモノ少ナカラズ。

- 一、施シテ報ヲ願ハズ。受ケテ恩ヲ忘レズ。
- 一、他山ノ石ハ玉ヲ磨クベシ。憂患ノコトハ心ヲ磨クベシ。
- 一、水ヲ飲ンデ樂シムモノアリ。錦ヲ衣テ憂フルモノアリ。
- 一、出ヅル月ヲ待ツベシ。散ル花ヲ追フコト勿レ。
- 一、忠言ハ耳ニ逆ヒ、良藥ハ口ニ苦シ。

(中根若志―東里外集)

一一一、冬の雪國 その一

同じく我が國土のうちながら、琉球・臺灣に住む人は、雪といふものを知らぬ。まして、雪國の冬の有様などは、彼等には嘘としか思はれまい。

寒國では霜が降り出すともう、そろそろ冬籠の支度に取りかかる。庭木や果樹は丈夫な柱を支として、小枝をば繩で吊して、雪折を防ぎ、小さい木は板や蓆（ハシ）で圍つて、凍らぬやうにする。家の外側は、鴨居（カモ）から二尺ほどあけて、其の下は悉く板でかこふ。障子の合はせめは紙で貼りつけて、吹雪を防ぐ用意をする。雪圍と目貼とがすめば、まづ冬籠の支度が整つたと言つ

かもる。
(鴨居)

てよい。

遠山の頂（ツツミ）に見えた白雪が、次第に麓の方に進んで来て、里に降りはじめるのは十一月の初。それから積つては消え、消えては積る中に、冬至（トウジ）頃になると、地上の雪がしつかり固まつて消えなくなる。これを寢雪といつて、これから翌春の三月頃までは、地面を見ることがない。雪國の冬の生活は寢雪から始まる。寢雪となれば、後はただ積るばかり。寒い盛りには、一日に五六尺も積ることがある。雪もよひのひどく寒い晩は、よく爐（カマド）に焚火（ヒキ）して更けるまで語りあふ。外

沈—沉

は沈沈として何の音もない。空は眞暗で一物も見えぬ。話の進むにつれて、おしつけるやりに寒くなる。かういふ夜が、最も多く積る時で、あくる朝目をさますと、耳が切れるやりに寒い。息が凍つて、夜著の襟が白くなつて居る。起き出て臺所に行けば、屋根裏の煤や蜘蛛の巢が、銀モールのやりに眞白に凍つてゐる。髭にも氷柱が下る。銅盥を取れば、手について離れぬ。鍋を取れば、鉉が指に凍りつき、煙草を吸へば、煙管の吸口が唇に凍りつく。無理にはがせば、皮がむけてしまふ。窓を開けば雪が腰を没するばかり。えらい寒さだ。

寒暖計はと見れば、水銀が華氏の最底の一點に縮み込んで、ぼつちりも上つて居らぬ。

餘—余

積つた雪は踏み固め、或は拂ひのける。雪を踏むには、深沓といふものがある。藁製で、膝にかかるほどの深さである。一尺前後の雪にはこれで間に合ふが、二尺餘にもなれば、カンジキをかけねばならぬ。なほ深く積れば、其の上に米俵をはき、下がためして、其の上を再び固め直す。道が高くなつてからは、雪搔で道の兩側に搔き上げる。搔き上げるに随ひ、次第に高くなつて、遂に高い銀の堤が出来上る。其の堤の高さが、時



高田の雪景

の軒よりも高くなる。往來へ出るには、戸口から穴を掘り、段をつけて、雪の梯子を上ら

ねばならぬ。まるで一種の穴居生活である。

屋根の上にも雪が積る。三四尺になると下さねば

おろす(下)

たひら(平)

ならぬ。いはゆる雪おろしで、一冬に三四回は普通の事である。下す毎に、軒端の雪がますます高くなり、時には軒よりも高くなる。かやうな場合に、最も人を困らせるのは吹雪で、一ふき吹きすさめば、屋根の雪と地面の雪とが、平らになつて閉されてしまふ。家の内は闇になる。慌てて掘り開けば、やがて、また閉される。全く人と雪との戦で、雪のやり場の無い處では、雪塊を楯に積んで、遠方の川に棄てねばならぬ。

雪中生活で最も怖しいのは、ザイといつて、雪の上を走る洪水である。幅狭き河流は、嚴冬の眞夜中にな

總一総

ると、ややもすれば氷結する。氷結した上に、上流の水が流れて来てすぐ凍る。兩岸の雪が其の上に落ちてまた凍る。かくして上流の水は堰かれ堰かれて、遂には積雪の上を走つて、高窓より瀧の如く室内に注ぐ。寐耳に水の大騒。町中總出で、川筋の氷を切り開く。あわただしさは、言葉にも筆にも盡されぬ。

二三、冬の雪國 その二

美しいのは氷柱である。方言に金氷かねこほりともいふ。細き太き短き長き無数の氷柱が、軒から下つた状は、研ぎ

劍一劍

すました劍をさかさまに吊したやう、筧がさかさまに生えたやうで、日光を受けて照り輝く時は、水晶の簾かとも疑はれる。長さの四尺五尺、徑の二寸三寸のもの、は、不斷に見る所で、大廈高樓から垂れさがる氷柱には、徑二三尺、地面から生え抜いた、大きな柱のやうに見えるのも少なくない。子供のあるびには、雪達摩・雪女房・御堂づくり・坂づくり・隧道づくり・雪合戦など、皆とりどりに興味はあるが、わけて楽しげなのは雪すべりである。寝雪になると、車馬が廢つて、橇の世の中になる。橇は雪中唯一の運搬器で、家として備へ

ちづ(怖)

ぬはない。晴天が續いて、橇が頻りに通ると、道路の雪が、磨りみがかれて鏡のやうになる。あぶないこと甚だしい。油斷すればすぐに轉ぶ。老人や用心深い人は、下駄・足駄のうらに釘を打ち、藁靴に鐵カンジキをつけて、おづおづとねらひ歩くが、待ちかねるは子供で、彼等はそれを遅しと、竹ボホラといふ滑下駄をはいて、勢よく滑り出す。巧な子供は、「先よけ、先よけ」と呼ばはりながら、物の見事に、一二町は一息に滑りゆく。馴れぬ者の側目には、冷汗するほどあぶなく見えるが、馴れた者には、これほど心ゆく遊はない。

やはらか
(柔)

野一埜

寒が明いて春雨が降り出すと、積つた雪の嵩が減つて、どつしりと締つて来る。此の締つた雪の、夜半に凍つたのを堅雪といつて、これがまた暖國人には思ひもよらぬものである。今までは綿のごとく柔で、脛を没し腰を没した雪が、堅雪になると、靴でも下駄でもぬがらなくなる。田畑も野山も石のやうに堅くなる。かうなると、學校に通ふ子供は、田でも畑でも見とほしに、一直線の近路を行く。勇んで川狩や兎狩に出かける。

魚の捕り方が又面白い。小川ならば、魚の居さうな

こほり(氷)

所へ行つて、上流を堰きとめる。次に目ざした場所へ、雪塊を山の如く投げ込むと、水は忽に干てしまふ。其のあとで、泥を掻きわけて、鯉、鮒、泥鰌、逃がす氣遣なく、思ふままに生け捕られる。池、堀、湖水などは、厚氷を渡つて、目星をつけた所に行き、鍬や鋸で氷を割つて、一、二尺の口をあけ、板でしきりに水をかい出せば、大魚、小魚、潑刺として氷の上に跳りあがる。

かかる雪國の奇觀は、暖國人のとても想像の出來ぬ事であらう。(五十風力)

すずり(硯)

二三、寒中見舞の文

小寒と申し候ふ程は、さほどにもおぼえず候ひしが、さすがに大寒に入りし朝よりは、硯の水もこほり、寒さしみじみと身をさすやうに思はれ候。御許御一統様、おかはりもあらせられず候ふや。さて、この暖爐、專賣特許とかにて、ある人もとより二三個譲りうけ、試み申し候ふ處、よほど效能あるやうに覺え候ふまま、寒中御見舞として、壹個進上仕り候。木炭よきほどにお差し入れなされ、直に蓋遊ばして、御座敷の隅などに打

ち置かせられ候はば、二三十分の中に、室内春のやうなる心地致し申すべく候。手前方老人などは、一度用ひ候ひしより、片時も側去らず、この寒中は寒さ知らず、にすぐすべしなど申し居り候ふ事に御座候。これよりさし上げ候ふ物を、かく褒めはやし申すこと、いかかしくは候へども、決して妄なることは申しあげざるつもりに候へば、御試みあそばさるべく候。まづは御見舞かたがた、一筆申しあげ参らせ候。かしこ。

同 返事

さほり(障)

猪一猪

寒さに困じて、久しく御無音申しあげ居り候ふ處、今日は思ひがけなく御消息たまはり、嬉しく拜見仕り候。いづれも様御さほりもいらせられず候ふ事、まづまづ御めでたく存じ候。さて、御惠み下され候ふ暖爐、いかにも見事なるものにて、一同うち寄り、とりはやし居り候。それについては、御こまごまと、使用法さへ御書き添へたまはり候ふかたじけなさ。早早用意仕るべく候。老人はじめ一同より、厚く御禮申し上げ候ふやう申し候。この猪肉、少しばかりに候へども、日光の

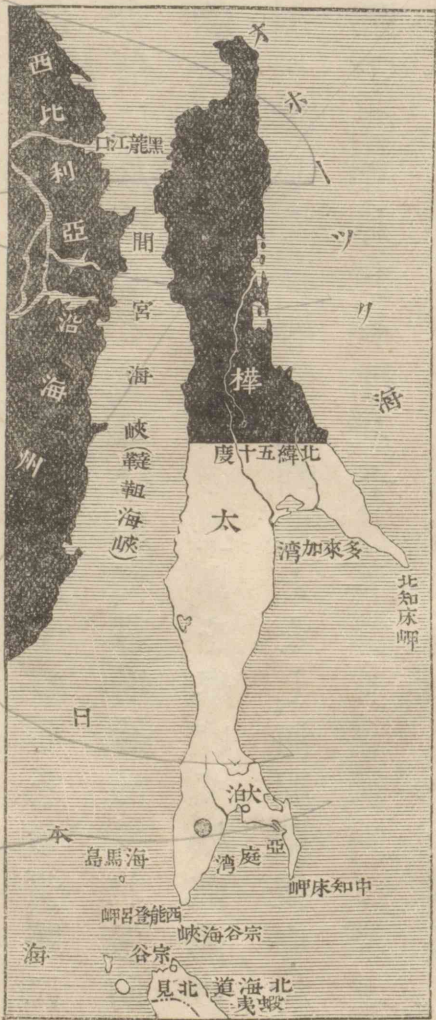
方より、只今貫ひあはせ候ふにつき、ほんの御うつりに差し上げ申し候。何とぞ御臺所の御用に御加へ下されたく願ひ上げ候。いづれそのうち參上、いろいろ申しあぐべく、とりあへず御受のみ、かくの如くに御座候。あなかしこ。(池邊義象)

二四、樺太

樺太の地たる、南端は宗谷海峽を隔てて、北海道本島と相對し、西岸は間宮海峽を挟みて、露領沿海洲に沿ひ、その北端は黒龍江口を包み、以て、日本海とオホ

くほ(加)

ーツク海とを分割せる細長き一島にして、沍寒甚だしき地なりといへども、その富源は無盡藏にして、海産物豊に、森林多く、鑛山も少なからず。この一大富源



たる樺太は、往時實に我が國の領土たりしなり。抑、徳川氏の初世の外交は、異教の禁ありし以來、僅

えぞ(蝦夷)

に支那オランダの二國のみに限りて、來往を許すに過ぎざりしに、露人既にシベリアを收め、南下の勢漸く急にして、我が樺太千島を侵すのみならず、將に蝦夷本島に及ばんとす。是に於て、幕府始めて北邊防禦の急務を悟り、蝦夷樺太の全島を擧げて、松前藩の所領より移して、幕府の直轄地となし、河尻肥後守、村瀬淡路守の二人を奉行とす。

間宮林藏
名は倫宗。常陸筑波郡谷井田村に生まる、松前奉行の屬吏。

幕府更に樺太探檢の必要を感じ、文化五年、間宮林藏に命じて、彼の地に赴かしむ。林藏、單身、幾多の險難を冒し、岩窟に宿し、風濤を凌ぎ、遠く北方無人の境に

至るまで、徧く跋渉し、遂に韃靼海峽を發見し、初めて樺太の島地にして大陸に附屬せざることを知り、更に進みて大陸に渡り、黒龍江を遡り、久しき時日を探檢に費し、樺太の我が領土たることを明にし、歸りてこれを幕府に復命せり。

其の後、幕府再び蝦夷全島を擧げて、松前藩の封に復せしより、北邊の經營も亦漸く廢弛しければ、爾來、露人は絶えず南進して、殆ど侵略の功を奏するに至れり。嘉永六年、露使プーチヤチン長崎に至り、通商互市の條約を結ぶと共に、樺太の境界設定を請ひしか

プーチヤチン
露國の水師提督。

ども、幕府これを許さず。安政元年、露使また下田に來り、再びこれを請ふに及び、やむを得ず、修好條約を結び、且つ、樺太島内に日露兩國人の雜居を約せり。

越えて安政六年、露使ムラヴィエフ横濱に來り、更に樺太問題を提起して、その全島の露領たるべきを主張す。是において、文久二年、幕府、外國奉行竹内下野守、神奈川奉行松平石見守等を露都に派遣して、これを議せしめしかど、遂に要領を得ずして歸る。慶應三年、再び小出大和守、石川駿河守等を遣ししかど、なほ島内雜居の約、舊の如くなるを得たるに過ぎざりき。

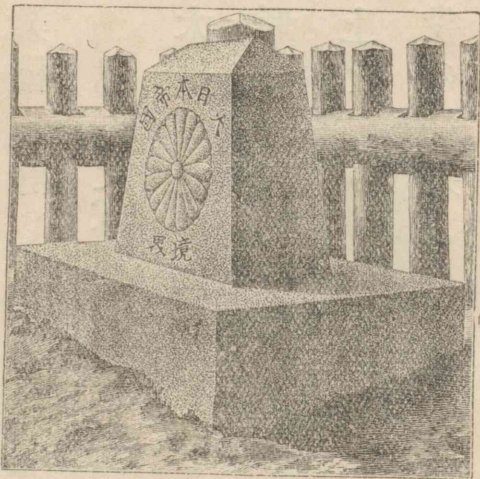
ムラヴィエフ
露國の東部西
比利亞總督。

小出大和守
名は秀實。
石川駿河守
名は謙三郎。

黒田清隆
鹿兒島藩士。
維新の功臣。
後華族に列し
伯爵を授けら
る。

副島種臣
佐賀藩士、蒼
海と號す。維
新の功臣。後
華族に列し伯
爵を授けら
る。

爾一尔



樺太境界標

維新の後、明治三年、樺太開拓使を置き、開拓次官黒田清隆は樺太駐在を命ぜらる。然れども、露國の經營は益、急にして、我が國のこれと頡頏すること殆ど望むべからず。是において、外務卿副島種臣、北米アラスカの例に倣ひ、買取の計を立てたりしが、議行はれず。八年、終に千島と交換の約を結ぶに至り、全島露國の領土となり、爾來、我が漁人は、纔にその沿岸一部の漁

業權を許さるるに過ぎざりき。

思ふに、臺灣が我が國南端の關鍵たるとともに、權太はまた實に我が國北門の鎖鑰たり。兩者の我が國形・國勢に於ける位置かくの如し。まして、權太は、歴史上、その我が領土たるべきを示せるをや。今や、日露戦役の結果として、その北緯五十度以南の地の、再び我が領有に歸するに至れるは、誠に積年の宿望を達したりといふべきなり。

二五、伊能忠敬その一

忠敬
東河と號す。
下總國武射郡
小堤村神保氏
の子。



伊能忠敬肖像

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平平凡凡の人となり、一意専心、ただ伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を、最も圓滿に最も麗しく果さんことを期し居たりき。

およそ、才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することのみ身を委ねんとするは、免れ難き習なり。たとひ己が

ならひ(習)

欲せざることなりとも、その爲さざるべからざることなる以上は、甘んじて我が情を屈し、わが氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、その人、ただに才氣あるのみならず、また、實に徳量ある人と謂ふべきなり。

世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少なし。年少にして才のみ優れたるは、譬へば、鋭き刀の肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るる恐は免るべからず。されば、世の奇才を抱きながら、成功を見ずして、中途に事を廢する例は、數へもつくしがたし。忠敬が算數・曆術の學を嗜み、且つ、これをよく

すべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし」といふを、唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大きいなるを見るべきなり。

かくの如くにして、伊能家は興りぬ。景敬は家を繼ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、ここにおいて圓滿に果されたりと謂ふべし。

忠敬ははじめて閑散の身となりぬ。忠敬の身は、こ

れより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時、も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、わが力を試みるに足るべきなり。忠敬は、常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、はじめで學に就き、而して後、漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身のまさに老いんとするを歎ずることなかれ。

佐原
下總國香取郡

二六、伊能忠敬 その二

さるほどに、忠敬は、その郷里佐原を出でて江戸に來り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様の笈を負ひて郷關を出て、都門に遊びて師を尋ぬる書生と異なるところは、ただその若きと老いたるとの差のみ。かくて、忠敬は、身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから、幕府には曆法改正の舉ありて、これがた

曆法改正
寛政九年に成る。寛政曆と稱す。

高橋作左衛門
名は至時。
號一號

め、特に大阪より、高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門は東岡と號して、算數曆術の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひ、おのれが學業など、その人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、あへて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、流石にさる事なく、喜びてそが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたる

嘲諷

をば、屢、笑柄となしたりといふ。

晩學のかたきは、實に、いつの世にありても、かかる嘲笑の存するがためなり。ここを以て、非凡の士にあらずば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。元來、老いて學ぶは、たまたまその志の淺からざるを顯すに足るのみ。また何の不可かあらん。況や、また、何の恥づべきところかあらん。思ふに、區區たる群小の嘲笑も、忠敬においては、ただ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしならん。かかれれば、忠敬と同門生との優劣勝敗

いはんや
(況)

堤—隄

は、比較するまでもなく明なることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して、洪水のおし寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて、忠敬が、はじめて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實に五十六歳の時なりき。五十六歳といへば、人は暮齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬は氣力旺盛にして、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せん

裏—裡

とする勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一に、この元氣勃勃として燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟、早老の人種なりといふ。是豈に我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。(幸田成行)

二七、學藝に志す者の訓

今の人、或は學に志し、或は藝に志すもの、一旦は憤を發し、晝夜をわかたず勤め勵むといへども、すでに

半月を經、一月を過ぐれば、怠る心はやく生じ、我がつとめの至らざることはいほで、これを性質の愚に歸す。馬は早しとて朝しばらく走りてやまんには、いかでか牛の終日ありかんに及ぶべき。谷間の石の磨かれ、井幹の圓くなるも、豈に一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、かくして後その驗あり。人一生の力を用ひてすら、なほその奥義に至らんは易からじ。まして、我が半月一月乃至半年一年の務を以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるも甚だしと謂ふべきなり。

李白
字は太白、青蓮と號す。有名なる詩人。

小野道風
葛弦の子。能書三蹟の一人。

えだ(枝)

昔、唐の李白、書を匡山に讀む。やうやく倦みて外に出でしに、道に老人の石にあてて斧を磨くに遇ひぬ。これを問へば、「針になさんとて磨くなり」といふ。李白大いに感じて、再び書を讀むことを勤めて、終にその名を成せりと。又、小野道風は本朝名譽の能書なり。若き時、手を學べども進まず。或日後園に徘徊しけるに、たまたま、蛙の、泉水のほとりのしだれたる柳に飛び上らんとしてとどかざりけるが、なほも幾度か飛びつきて、終にその枝にうつれり。道風これを見て、始めて藝のつとむるにあることを悟り、これより學びて

やまざりしかば、その名今の世までも残れり。これ皆百折撓まざりし功に由れるものならずや。

(三浦晉一梅園叢書)

二八、犬ころその一

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひだすのはボチの事だ。春雨のしとしとと降る、薄ら寒い、或夜のことであつた。私は例の通り、宵の口から寝てしまつたが、ふと目をさますと、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかとするれば、すうとする。或は高く、或は低く、單調な

よひ(宵)

凄(凄)

がら拍子を取つて、さながら大鋸で大丸太を挽き割る様な音だ。私は夜中に滅多に目を覺したことがないから、初はひどくびつくりしたが、能く考へて見ると、なに父の躰なので、やつと安心して、そのまま再び眠らうとしたが、どうもこれが耳に附いて寝附かれない。仕方がないから、聞えるままに、その音に聴きいつてゐると、何時からとなく囃子の手が込んで来て、合の手に、遠くで微にきやんきやんといふやうな音が聞える。躰が凄じい時には、それに消されて聞えぬが、躰が低くなると、判然と手に取るやうに聞える。不

思議に思つて益、耳を澄ましてゐると、次第に大きく、高くなつて、遂には、軒と離れ離れに、確に門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく、小狗の啼聲だ。時時咽喉でも締められる様にけたたましく、きやんきやんと啼き立てる。その聲こゝろ尻びりがやがて段段に細く悲しげになつて、めいるやうに遠い遠い處へ消えて行くかと思へば、忽ちまた近くで、堪へきれぬやうに啼きだして、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私はそつと夜著の中から首を出して、「小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう」と、うるさく母にきくと、母はやさしく、「何處かの人が棄てた狗であらう」と、一説明してくれて、「もう晩いから黙つてお寢」と、あちらを向いてしまつた。

私も亦夜著をかぶつた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の軒が又うるさく耳に附く。寢られぬままに、私は夜著の中で棄狗の有様を繰り返し繰り返し考へた。

かひいぬ
(飼犬)

三〇、犬ころその二

まづ、何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。ちつぽけなむくむくしたのが重なり合つて、首を擡げて乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、その側へどさりと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから、舌の先でたわいもなくころころと轉がされる。轉がされては大騒して起き返り、又よちよちと這つて、ぼつちりと黒い鼻面で親犬のお腹を探り廻り、漸くおもふ柔な乳首を探り當て、あわてて吸ひ付いて、小さな兩手で揉み立て揉み立て

吸ひ出すと、甘い温な乳汁が出て來て、咽喉へながれ込んでゆく、何ともいへずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻面で割り込んで來るとられまいとして産毛の生えた腕を突つ張り、大騒をやつてみるが、到頭とられてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸ひ付く。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、とろけさうな好い心持になり、ついうとうととなると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて又吸ひ付いて、一しきり吸ひ立てるが、ぢきに又たわいなくうとうとと

なつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けるも知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐる所をむづと掴んで宙に吊す。驚いて目をばつちりあき、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとすが出られない。暫くもがいて居る中に、ふと足搔が自由になると、領元を撮まれて、高い高い處からどさりと落された。うろろろとしてそこらを視

ふるひ(慄)

廻すけれど、何だか變な寂しい眞暗な處で、誰も居ない。ぼんやりとしてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖しく寒くなる。身慄一つして、くんと親を呼んで見るが、何處からも出ては來ない。途方にくれて、よちよちと這ひ出し、夜中にただ一人、温な親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻るのであらう。それがさつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、何時か又戻つて來て、何處をどりもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

三一、 犬ころその三

私はたまらなくなつて、母に頼んで、この小狗に食物を與へて一晩泊めてやることにした。犬嫌の父は、泊めたその夜を啼きあかさされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐ひ出すといひ出したから、私は小狗を抱いて逃げ廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、併しこれも一時のことと、その中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。逐ひ出す筈のものに、何時しかポチといふ名ま

さらひ(嫌)

で附いて、姿が見えぬと、父までか一緒に捜すやうになつてしまつた。

犬好は犬が知る。私のポチを愛する心は、ポチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には、犬嫌の父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向もせんで行つてしまふ事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて、目を輝かして飛んで来るが、しかし唯これだけのことで、その時のポチはやつぱり犬に違ひない。そのやつぱり犬に違ひないポチが、私に向ふと犬でな

かは(側)

くなる。それとも私が人間でなくなるのか、どつちだかそれはわからん。

朝起きて縁側に出る私の聲を聞き付けると、ポチは何處に居ても一目散にとんで来る。急いで庭へおりると、ポチが透かさず泥足で飛び付く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉りたてて、嬉しさうに面を見上げる。視おろす。目と目とびつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱にひんだく。ポチは抱かれながら身をもがいて大あばれにあばれ、私の手を舐め、胸を舐め、頤や頬までも舐める。父が顔を顰めて汚

ほほ(頬)

い汚いといふ。なる程考へて見れば汚いやうではあるけれども、しかし私は嬉しい、止められない。どうしてこれが止められるもんか。私が何も好い物を持つてゐるぢやなし、ポチもそれは承知でする事だ。利害の念を離れてゐるのだ。ただ懐かしいといふに過ぎないのだ。毎朝これでは著物がたまらないと、母はそれをこぼすけれども、著物なんぞの汚を厭つて、ポチのこの志を無にすることは出来た話でない。

(長谷川四迷―二葉亭全集)

三二、雛祭の記

我が幼兒は、去年の三月に生まれたり。今年は初雛なれば、せめて内裏雛のみにて購ひくれよ。一度購ひ置けば、此の兒の一生あるものなれば、など、母なる人の切に望むに、やがて、内裏雛と五人囃子といふものぞ、我が兒の持物とはなりにける。幼兒よりも、母なる人の喜譬へんやうなし。

つくゑ(机)

奥の間の三尺の床に、本箱を横たへ、机の抽匣ひきだを重ね、三重ばかりの壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを並べ祭るに、寂しげながらも目美しく、吾は

ゆくりなくも、我が亡き親のことなつかしく、忍ばしくなりぬ。

あぶり(お煎)

膳椀などの箱と共に、棚の上に並べられたる一つの箱には、手足の無き紙雛、鼻の缺けたるはふ子様、去年のお煎の紙に包まれたる、小さき箆笥の壊れたるを觀世捨にて括りたるなどがあり。吾は、これを雛様箱と呼びて、三月の節供來れば、其の箱を、直に臺として、其の上に、此の雛を祭りて、楽しみしが、隣の家のお美しきを見て、歸りては、餘りに寂しく汚きに嫌らず、母上に訴ふれば、男の子のするものにあらずと叱られ

て、吾に姉妹なき事の情なく、はては、吾の女にあらぬことをさへ情なく覺えて、厚紙に金紙貼りつけ、これを雛の屏風なりとて、僅に自ら慰めたる事など、今の如くに思ひ出でられぬ。

かかる所に、友の妹なる人より、裸人形を、幼きものと贈られたれば、五人囃子ばかりの寂しげなりしものも、俄に引き立ちて見え、それを内裏雛のいづれの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議するもいとをかし。

其の日の暮、箆筒・長持・兩掛より、鏡臺・茶箆筒・金盃・雪

洞ぼりなど、何れも美しく、新に壇に飾る事となりたり。桃の花も生けられたり。菱餅も、お煎も、白酒も供へられたり。やがて、小さき雪洞に燈燃すに、雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄に咲き競ふかと覺え、五人囃子の鼓の音も、今か響きいづらんと樂し。幼き者の喜、母なる人の喜、さては、髯男の吾が喜、春色俄に三尺の廬に充ち満ちたるが如し。

唯古びたる手足の無き紙雛、鼻の缺けたるはふ子様を、此處に並べ見ぬことの、物足らぬやうに覺えしは、如何なる故にかあらん。(高濱清—寒玉集)

三三、少女緹縈

漢の世、齊國の太倉令淳于意が女に、緹縈といへるものありけり。幼より至孝にして氣節あり。同胞五人皆女兒のみなりき。

決
決

ある時、淳于意犯せる罪ありて、刑せらるる事に決しぬ。かくて、長安の獄に繋がれんとて、捕はれ行く時、泣き悲しめる女兒等を顧みて、歎き罵りて云へるや、「あはれ、われは五人の子持ちたれど、男兒といふもの一人も持たねば、かかる時には何の用にも立たぬ

うなづく
(頷)

なり」と、口の中にうち呟きけるを、少女緹縈洩れ聞き、いと口惜しき事に思ひ、女なりとも父を救ふ手段なからずやとはと、ひとり心にうなづき、はふり落つる涙を拂ひ、後れじと父があとを追ひて長安に至り、時の天子孝文帝に書を上りて、

「我が父太倉令となりしより、齊の民みな其の廉平を悦べり。然るに、今はからずも上の御法度に違ひて罪を得たること、いとも畏きことながら、又まことに悲しき事なり。はや重刑に處せらるべしと承り候ふが、凡そ、死せる者はまた生くべからず、刑せ

わらは(妾)

らるる者はまた舊の體にかへすべからず。よしや、
過を悔いて善に移らんとすとも、またいかにとも
すべきやうなからん。されば、願はくは、わらはが身
を終ふるまで、官婢となりて事へまつり、父の罪を
贖ふべければ、父をして、よく過を改めて自新の道
を得しめんことを。あはれ、聖明の天子上に在しま
す、いかで少女が願を聞き召し入れさせ給へ」と
歎きけり。文帝、この上書を御覽ありて、深く少女緹
縈が孝心を感じ給ひ、即ち詔を下して曰はく、
「むかし、舜帝の時は、罪ある者には異様のしるしあ

はづかし(辱)

る衣服を被させ、これを衆人に示して辱められた
るのみなりき。されど、見る人深く恥ぢてみづから
戒め、罪を犯す者極めて稀なりきと聞く。かかるを
こそまことの至治の世とはいふなれ。今や、法嚴に
して、死罪に行ふこと多く、肉刑に五等を設く。かく
して悪を懲さんとするに、却て罪惡を犯す者ます
ます多し。これ實に朕が不徳の致す所なり。罪を犯
す人を咎めんよりも、まづ朕自らを責めざるべか
らず。朕は、かかる孝女に對して、痛く自ら恥づるな
り。緹縈が志を憐み且つは愛でて、父が罪をば赦す

わづらひ。
(煩)

べし」
と。かくて、その罪を赦されたるのみならず、刑法の重きは民の煩を増すものなりとて、ここに舊き法を改められ、且つ、肉刑を除く詔を下し賜ひぬ。
緹縈、少女の身を以つて、免れ難き父が罪を赦さるることを得しめたるのみならず、世にもおそろしき肉刑を廢する善政を行ふに至らしめぬ。至誠の力は、げに大いなるものなりけり。(下田歌子―外國少女鑑による)

三四、慈善家

天明卯年
三年癸卯な
り。光格天皇
の時。

おほす

衛一衛

天明卯年の凶作に、奥州の津輕南部、饑饉甚だしく、凡そ足腰の立つものは、四方に走りて食物を求む。羽州秋田の如きは、鄰國のことなれば、餓人の來ること數萬人に至れり。さて、秋田の地も亦凶年にて、救ひおほすること能はざりしかば、その餓人溢れて、また鶴岡にゆくなど、路頭、餓人にて押しあひきとなり。食を得ざるものは、忽ちその地にて餓死するにより、鶴岡の人も、各、その救助に力を盡しけり。
その中に、わきてあはれに聞えしは、鈴木今右衛門といふ者にて、もとは鶴岡の中間頭を勤めし者なり

たくはへ。
(貯)

しが、いささかの貯も出来しかば、近き頃は役義をひきて、自ら耕作して世をわたりけり。この人、元來慈悲の心深く、この度も、身代の限を出して、餓人を救ひけるに、なほ夥しき餓死を見ては、いとど忍び得ず。そのために、所持の田畑並びに諸道具等まで、ことごとく賣り拂ひたり。

その妻も、また心だてよき女にて、自分の衣服の類を、大方賣りつくし、あとには、僅に晴の衣服二枚残りしを、ある日、それをも賣りて救はんといふ。今右衛門これを聞きて、「女はことに衣服などを愛する者な

さがへ。
(著替)

るに、これをも賣りて餓人を救はんと思ふは、殊勝ことごとくの事なり。然れども、男とちがひ、また外へ出づるときは、著がへの一つ位はなくてかなはざる事なり。そはやめよ」といひしに、妻「さればこそ、此の著替をも賣らんと存ずるなれ。著替あるが故に、外へ出づる心も出でなん。外へ出づるが故に、櫛も簪も入用なり。今、これを賣りて、外へ出づるころを斷たば、櫛も無用なり、簪もまた無用なり。無用の物には心も残らず候ふ。これをも賣り拂ひなば、また餘程の人をも救ひ得べし」とて、遂にみなみを賣りて救ひぬ。

纏—纏

その娘十二歳になりけるが、一日、同じ年頃の小娘、
饑ゑ疲れ、食を乞ひて門に立てり。見れば、餘寒の嵐烈
しきに、やうやう解き物のひとへ一枚を身に纏ひた
るのみ。母親見かねて、わが娘を呼び、そなたは綿入二
枚を重ねてあたたかに著たるが、あの子は誠に不便
なる有様なり。年のほども同じ位なれば、衣服もほど
よかるべし。おひおひ暖氣にもなるべければ、その綿
入一枚ぬぎて、かの小娘にとらせずや」といへば、娘、心
よげに得心して、上に著たるよき方の綿入を與へた
り。父母ともに涙を流して悦べりとぞ。この父母あり

て、この娘ありとやいふべからん。(橘南谿—東遊記)

三五、 櫻花

我が日本人の、國花として世界に誇るに足るもの
は櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め谷
に満ち、雲とまがひ雪と散る景色は、日本特有の美景
である。

牡丹は支那の國花であり、薔薇は歐米人の花の王
と稱するものである。いづれも棄て難い濃艶な美し
い花ではあるが、清楚人を動かすといふやうな趣は

稱—稱

うづむ(埋)

きはめて
(極)

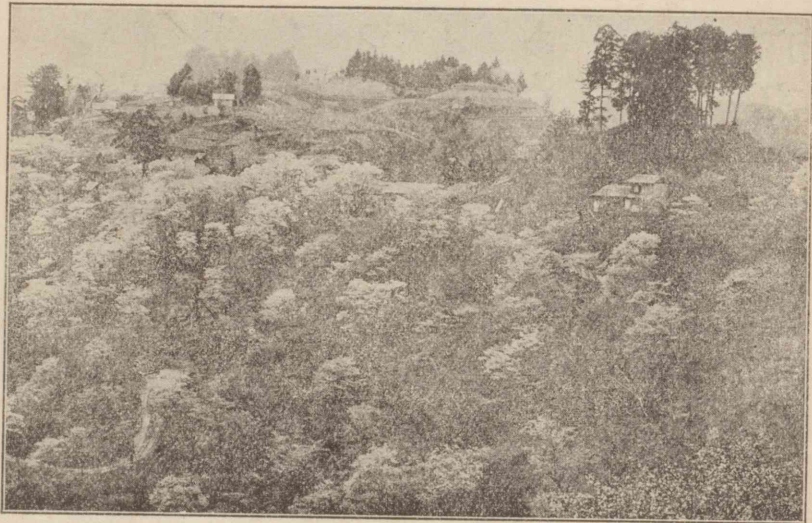
空にしられぬ雪
古今集に貫之「櫻ちる木の
下風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける。」

乏しい。日本の櫻はその色は極めてあつさりとした、所謂櫻色で、樹毎に無數の花を著け、咲くときは、一時に爛漫と残なく咲いて、忽ち世界を花の中に包んでしまふ。二十日草の長い盛りもなく、薔薇の高い香氣もないが、實に綺麗で、又その散りぎはがまことに潔く、肌寒くない風に亂れては、空にしられぬ雪とまがへられる。その風趣は、とても他の花の及ぶところでない。げに花の中の花は櫻である。

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。晝はどんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない

照りもせず云々
新古今集に大江千里「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。」

吉野山の歌
八田知紀の作。



吉野山の景色

花曇、夜は照りもせず曇りもはてぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には、最もふさはしい景色である。
吉野山、霞の奥は知らねども、見ゆるかぎりは櫻なりけり。
これは満山花に蔽はれた吉野山の景色。

花の雲の句
松尾桃青の
作。

玩一翫

花の雲、鐘は上野か、淺草か。
これは全都花に包まれた花曇の空の光景である。
櫻は、牡丹や薔薇のやうに、花瓣を賞玩する花ではな
くて、樹として賞玩する花である。否、多くの樹を植ゑ
つらねて、その中に立つて賞玩する花である。上から
見て愛でる花ではなくて、下から眺めて愛でる花で
ある。春風三月、日本人は、しばし此の花の世界の人と
なるのである。(芳賀矢一一月雪花による)

改訂高等女學讀本卷二終

鉛字製本

大正五年一月二十七日
大正四年十一月十三日
大正四年十月十五日
大正四年十月十日
大正四年十月五日
訂正發行
訂正發行
訂正發行
訂正發行
訂正發行
改訂再版發行
改訂再版發行
改訂再版發行
改訂再版發行
改訂再版發行

改訂高等女學讀本

定價
卷一より各金參拾貳錢
卷四より各金貳拾八錢
卷五より各金貳拾八錢
卷十まで

著者 佐藤 球
著者 鹽井 正男

發行者 株式會社 明治書院

取締役社長 三樹 一平

印刷者 仙葉 元太郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 秀英 舍

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

園電話本局二四三八番

不許複製



